

ひきこもり 支えあれば絶望ない

家に閉じこもり、誰とも話したくない。札幌市手稲区の大田原守穂さん(58)は双極性障害(そううつ病)を患い、20代後半からひきこもりを何度も繰り返してきた。北海道ひきこもりの老後を支え合う連絡協議会(道ひ老連協)が8月27日に札幌市内で初めて開く集会で、大田原さんは約30年間の体験報告をする。「家族が私を支えてくれた。この経験が他の当事者や支援者の役に立ってほしい」と思いを語る。

当事者の大田原さん 来月、札幌で体験報告

大田原さんは旭川生まれで札幌育ち。両親と、きょうだい3人いる。大学の建築学科に進んだが、中退した。フリーターを経て大工になり、25歳で結婚、26歳で長男が生まれた。双極性障害と診断されたのは27歳。今まで、ほぼ4年ごとにくらなくなって外に出られず、ベッドから起きられない。「誰ともしゃべりたくなくなり、家に閉じこもってしまう」

「命は痛みや苦しみによって育まれる」として、自らの経験を肯定的に振り返らない大田原さん。あ

りそのままの自分を支えてくれた妻や息子、両親たちに心の底から感謝している」と話す。シンポの基調講演ではひきこもりと家族の支え、闘病の現状を語る。「人間はそれぞれ『時計(の速さ)』が違う。違いを理解した上で、周囲の支えがあれば絶望はない」とを訴えたい」と話す。集会は午後1時～3時半、かぞの2・7(札幌市中央区北2西7)で、当事者や家族、支援者、関心ある市民が対象(定員30人)。参加費は当事者以外500円。申し込み不要、当日直接会場へ。

道ひ老連協、7団体130人加盟し初集會

中にはどこから落ちて肝臓を損傷し、現在は札幌市内で入院しながらリハビリ中だ。80代の両親は認知症。同い年の妻は38歳で脳卒中になり、右半身にまひが残り、長くは働けない。生活保護の受け給を考えたが、フリーターの長男が2年前から自分たちを金銭面で支えてくれるようになった。今も同居する長男は、かつてアルバイトで体調を崩し「入と接したくない」と話すこともあったという。

道ひ老連協は、12年間ひきこもった経験があるNPO法人レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク(札幌)理事長の田中敦さん(57)が、ひきこもり当事者や民間支援者が連携して事態を改善しようと呼び掛けて5月に発足した。7月24日に新たに「フコロの会」(帯広)が加わり、個人参加も含めて同ネットワーク内7団体約130人が加盟する。

話をし合う。80代の親が50代の子どもの生活を支える「8050問題は「9060」と高齢化が進む。田中さんによると、近年は「805020」のように多世代でひきこもりといったケースもあり、複雑化しているという。発足から約2カ月。田中さんは「参加した当事者から『孤立せず安心感を得られた』との声があった」と不安軽減に役立った組織化に自信を深める。一方で70代当事者から「自分が死後に放置されたくない」という電話もあり「見守りが必要と感じた」と指摘する。行政が対策に本腰を入れるよう、活動にどう巻き込むかも課題という。

昨年11月には肝臓がんのステージ4との診断結果を告げられる。今年5月、温泉療養を兼ねて訪れた新潟で、作業

大田原さんは詩人作家の星野富弘さん(群馬県在住)の生き方に共感している。星野

「互いに寄り添って生きていけることに感謝したい」と話す入院中の大田原さん



ロック受付
精神保健科

道ひ老連協は、12年間ひきこもった経験があるNPO法人レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク(札幌)理事長の田中敦さん(57)が、ひきこもり当事者や民間支援者が連携して事態を改善しようと呼び掛けて5月に発足した。7月24日に新たに「フコロの会」(帯広)が加わり、個人参加も含めて同ネットワーク内7団体約130人が加盟する。

8月の集会では大田原さんも含めた56、58歳の当事者らによるミニシンポジウムもある。テーマは「ひきこもりの老後」。親子後のきょうだい関係や生活維持への苦労を語り、今後の生き方を探る。集会参加者によるグループワークも企画。ひきこもり経験者のピアスタッフが加わり「障害や疾病の診断がつきにくく、福祉制度のはさまに置かれやすいひきこもりにどう対応するか」

(編集委員 鈴木雅人)

道ひ老連協の初の集會開催を告げるチラシ